

金澤醫科大學解剖學教室

(岡本教授指導)

胸骨筋(Musculus sternalis)ニ就キテ

二 井 一 馬

(昭和5年12月23日受附)

内 容 目 次

緒 言	文 獻
一. 材料及ビ方法	附 圖
二. 成 績	附圖説明
三. 總 括	

緒 言

曩ニ予ハ生體ニ於ケル胸骨筋ニ就キテト題シ(十全會雜誌第36卷第2號), 生體ニ認メタル胸骨筋ノ1例ヲ報告シ, 併セテ東西諸學者ノ樹テタル胸骨筋ノ本態ニ關スル假説ニ就キ論及セリ. 今更ニ予ハ該研究ヲ追加補遺ス可ク, 當大學學生解剖實習ニ際シ得タル材料ヲ用ヒ屍體ニ於ケル胸骨筋ニ就キテ論究セントス. 既ニ述ベタル如ク, 屍體ニ於ケル實驗報告ヲ生體ニ於ケル胸骨筋ノ實驗報告ト比較スル時, 前者ハ後者ニ比シ頗ル多ク, 之ヲ列舉引用スルニ違アラズ. Cabrolus ニ次デハ主トシテ Gruber, Turner, Bardeleben, Shepherd, Cunningham, Windle, Fick 及ビ Eisler 等ヲ舉ゲルヲ得可ク, 猶ホ最近 Ruge 及ビ Yap ノ之ガ詳細ナル報告アリ.

本邦人ニアリテハ獨リ足立博士ノ大ナル業績アルモ, 他ハ(大澤, 竹崎及ビ小金井, 荒井, 敷波(三氏共著))單ニ一, 二ノ實例ヲ報告セルニ過ギズ.

斯ノ如ク東西ノ諸學者ハ競フテ之ガ研究ヲ試ミ, 或ハ之ヲ人類特有ノ筋ナリトシ, 或ハ Panculus carnosus ノ殘餘物ナリトシ, 或ハ神經分佈區域及ビ周圍筋トノ關係ニ就キ論ジテ之ヲ胸筋族, 腹筋族及ビ胸鎖乳頭筋ノ一部分トナスモ, 甲論乙駁, 未ダ胸骨筋ニ對スル本態ハ不明ニシテ徒ラニ多數學者ノ興味ヲ惹ケル所以ナリ.

一. 材料及ビ方法

調査材料ハ昭和2年ヨリ昭和5年ニ至ル當大學々生解剖實習ニ使用セル屍體117體ニシテ, 第1表ニ示セル如シ. Schwalbe 及ビ Pfizner ノ1894年ノ研究觀察ニハ胸骨筋ノ如ク兩側ニ對性(Paarige Gebilde)ナルモノニアリテハ, 1屍體ヲ2箇胸骨筋材料ト假定スルコトノ重要ナルコトヲ説ケリ. 然レドモ予ハ特ニ其煩ヲ避ケル可ク之ヲ採用セズ屍體數ヲ以テ材料數トセリ. 材料出所ハ石川縣ヲ主トシ, 他ハ主トシテ隣縣富山, 福井ニ及ブ.

第一表 調査材料

性 年齢	♂	♀	(♂+♀)
12-19	3	7	10
20-49	29	7	36
50-X	36	34	70
年齢不明	-	1	1
計	68	49	117

學生解剖實習ニ際シ、先ヅ法ノ如ク、胸部正中線上ニ皮膚切開ヲ行ヒ皮下組織ヲ除去セル後、胸骨筋ヲ発見セル時ハ慎重ニ處理セシメタル後之ヲ描寫セリ。然レドモ神經支配ノ状態ハ既ニ學生ノ損傷セルモノアリ、又予自身ノ處置ニ際シ損傷セルモノ等アリテ、遺憾ナラ充分之ヲ調査スル能ハザリキ。

二. 成 績

第2表ノ如ク、予ハ胸骨筋ヲ117體中12例即チ10.26%ニ於テ認メタリ。之ヲ諸人種胸骨筋頻度及ビ足立博士調査ニヨル日本人成績ト比較スルニ、第3表ニ示セル如ク、予ノ成績ハ中野氏ニヨル支那人ノ21.9%及ビ足立博士ニヨル日本人ノ13.2%及ビ15.0%ヨリ頻度小ナルモ、其ノ他ノ何レノ人種ヨリモ頻度大ニシテ、本邦人ニアリテハ他人種ニ比シ頻度頗ル大ナルモノナルヲ認メタリ。斯ノ如ク胸骨筋ノ人種ノ差異ハ頗ル著明ニシテ、Schwalbe, Pfitzner, 足立博士及ビ Loth 等ガ、胸骨筋ヲ以テ人種解剖學上身體検査ノ重要ナル一觀察點ナリト論述セルモ亦宜ナリ。

第二表 胸骨筋頻度.(%)

年 齡	性	材 料	頻 度
12-19	♂	3	-
	♀	7	1 (14.29)
	(♂+♀)	10	1 (10.00)
20-49	♂	29	2 (6.89)
	♀	7	-
	(♂+♀)	36	2 (5.56)
50-X	♂	36	4 (11.11)
	♀	34	5 (14.71)
	(♂+♀)	70	9 (12.89)
年齢不明	♂	-	-
	♀	1	-
	(♂+♀)	1	-
計	♂	68	6 (8.82)
	♀	49	6 (12.24)
	(♂+♀)	117	12 (10.26)

第三表 胸骨筋人種比較表

人 種	報 告 者	百分比
黒 人	Chudzinski, I.e Double, Testut	8.4
愛 蘭 人	Macalister	6.0
愛 蘭 人	Cunningham	4.4
露 西 亞 人	Gruber	5.3
佛 蘭 人	I.e Double	4.7
英 國 人	Wood	4.0
蘇 格 蘭 人	Turner	3.2
「エルザス」人	Schwalbe, Pfitzner	3.3
「ケルント」人 (生體)	Pichler	2.9
「フィリッピン」人	Yap	3.7
支 那 人	中 野	21.9
日 本 人(屍體)	足 立	13.2
日 本 人(生體)	足 立	15.0
日 本 人	二 井	10.26

胸骨筋ノ男女性の差異ハ頗ル異同的ニシテ、Shepherd ハ男性ハ女性ヨリ頻度大ナルト言

ヒ、Turnerハ男性ハ女性ヨリ頻度小ナリト言ヘリ。又之等ト全ク相反シ、Bardeleben及ビCunningham等多數學者ハ兩性頻度ニ大小差異ナキモノナリト論述セリ。

予ノ例ニ於テ見ルニ、男性68例中6例即チ8.82%、女性49例中6例即チ12.24%ニシテ男性頻度ハ女性頻度ヨリ幾分小サク、Turnerノ成績ト相一致セリ。

以上胸骨筋12例(男性6例、女性6例)ノ主ナル調査點ヲ簡單ニ記載スルニ次ノ如シ。

第1例 屍體番號、1200、60歳、女性、石川縣人、右胸骨筋(第1圖參照)。

起始 二部分ヨリ起リ、右側ノモノハ太ク幅約1糎ヲ有シ、第6肋間ニ相當セル直腹筋鞘ヨリ起ル。左側ニハ細キ腱トシテ第5肋軟骨ヨリ起ル。左右ノ二部ハ略々第4肋骨ノ高サニ於テ合シテ1トナル。

停止 胸骨角ノ部ニテ筋束ハ左右ノ二側ニ大別サレ、右側ノモノハ第2肋骨ノ沿ヒテ右大胸筋ニ移行シ、左側ハ更ニ3箇ニ分レ、一ハ左胸鎖乳頭筋ニ移行シ、他ノ2箇ハ左大胸筋ニ移行セリ。

經過 左右相合シテヨリ正中線胸骨角ノ部ニ至ル迄上内方ニ斜走ス。筋腹ハ第3肋間ニ於テ最大幅ヲ示シ約1.8糎ヲ算ス。

第2例 屍體番號、1209、69歳、女性、石川縣人、左胸骨筋。

起始 正中線ヨリ左方4糎ノ距離ニテ第6肋軟骨ヨリ起ル。

停止 正中線ヲ距ル2糎ノ左側第2胸肋關節下緣ニ於テ極メテ細キ腱トナリ、正中線上ヲ横切りテ上方ニ斜走シ、右大胸筋ニ移行ス。

經過 筋起始點ヨリ第2胸肋關節下緣ニ至ル迄斜走ス。筋腹ハ第4肋軟骨上ニ於テ最大幅ヲ示シ約1糎ナリ。

第3例 屍體番號、1219、76歳、女性、石川縣人、左胸骨筋(第2圖參照)。

起始 第6肋骨ニ相當セル直腹筋鞘ヨリ、薄ク而カモ幅廣キ腱トシテ起ル。

停止 第2肋間ノ胸骨左側緣ニ一致シテ腱トナリ、次テ腱ハ2箇ニ分岐シ、1ハ正中線ヲ略々水平ニ横切りテ右大胸筋ニ移行シ、他ハ直チニ左側大胸筋ニ移行ス。

經過 正中線ニ向ヒ凹曲セル弓形ヲ呈シ、最大幅0.6糎ナリ。

第4例 屍體番號、1233、42歳、男性、石川縣人、兩側胸骨筋。

起始 左胸骨筋ハ第5肋間ニ當ル直腹筋鞘ヨリ、又右胸骨筋ハ第5肋軟骨ヨリ起ル。

停止 左胸骨筋ハ略々正中線上ニテ細キ腱トナリ、後右大胸筋ニ移行ス。右胸骨筋ハ正中線ニ近ク胸部筋膜ニ終ルモ、一部ハ左胸骨筋停止腱ト結合セリ。

經過 左右胸骨筋共ニ弓狀ヲ呈シ、左胸骨筋ハ正中線ヲ横切りテ他側大胸筋ニ移行ス。

第5例 屍體番號、1249、70歳、女性、石川縣人、右胸骨筋。

起始 右第4肋軟骨ヨリ起ル。

停止 右胸鎖乳頭筋停止腱ニ移行ス。

經過 略々垂直ニ近キモ幾分正中線寄りニ上昇ス。

第6例 屍體番號、1288、55歳、男性、石川縣人、兩側胸骨筋(第3圖參照)。

起始 左右胸骨筋ハ共ニ第5及ビ第6肋軟骨ヨリ起ル。

停止 左胸骨筋ハ第3肋骨ノ高サニ於テ2箇ニ分レ、一ハ右胸鎖乳頭筋ニ移行シ、他ハ極メテ細ク前者ヨリ猶ホ右方ニ偏シ、右胸骨筋ト合シテ大胸筋ニ蔽ハレ、胸骨把柄部筋膜ニ附着ス。右胸骨筋ハ左胸骨筋

ヨリノ一枝ト結合シ大胸筋ニ覆ハレ、胸骨把柄部筋膜ニ終ル。

經過 右胸骨筋ハ正中線ニ近ク略々垂直ニ走行スルモ、左胸骨筋ハ幾分内方正中線ニ向ヒ上走ス。左側最大幅1.7糎、右側0.5糎ナリ。

第7例 屍體番號、1304、18歳、女性、石川縣人、兩側胸骨筋(第4圖參照)。

起始 左胸骨筋ハ第5肋軟骨及ビ直腹筋鞘ヨリ起リ、右胸骨筋モ同ジク第5肋軟骨及ビ直腹筋鞘ヨリ起ルモ、左側ニ比シ幾分正中線ニ近シ。

停止 左胸骨筋ハ胸骨角ニ向ヒテ放線狀ニ分岐シ、其部胸部筋膜ニ附着ス。右胸骨筋ハ停止部3箇ニ分レ、右大胸筋ニ移行スルモノ、右胸鎖乳頭筋ニ移行スルモノ及ビ胸骨角部ニ分岐附着スルモノヲ區別ス。

經過 兩側共ニ胸骨筋ハ稍々正中ニ向ヒ凹曲セル弓形ヲ呈ス、左側最大幅1.5糎、右側3.2糎ナリ。

第8例 屍體番號、1321、63歳、男性、石川縣人、右胸骨筋(第5圖參照)。

起始 右直腹筋鞘(右第7肋骨ノ高サ)ヨリ起ル。

停止 2箇ニ分ル、一ハ更ニ2箇ニ分レ、左胸鎖乳頭筋ニ移行スルモノ及ビ左大胸筋ニ移行スルモノヲ區別ス。左胸鎖乳頭筋ニ移行スルモノハ胸骨上縁ニ於テ大胸筋淺層ニヨリ覆ハレ、猶ホ其部ニテ一部分左大胸筋ニ移行セルヲ見ル。他モ同ジク更ニ2箇ニ分レ、胸骨角部胸部筋膜ニ終レルモノ及ビ左大胸筋ニ移行セルモノヲ區別ス。

經過 右直腹筋鞘ヨリ上内方ニ斜走シ、右第4肋間ニ於テ2箇ニ分ル。筋腹ハ甚ダ大ニシテ最大3.8糎ヲ算ス。

第9例 屍體番號、1350、75歳、女性、石川縣人、兩側胸骨筋(第6圖參照)。

起始 兩側共ニ直腹筋鞘(共ニ第5肋間ノ高サ)ヨリ起ル。

停止 左右筋ハ正中線上胸骨角ノ高サニ於テ合シテトナルモ、次テ又2箇ニ分レ、一ハ右胸鎖乳頭筋ニ、他ハ左胸鎖乳頭筋ニ移行ス。左胸骨筋ハ經過ノ途中ニ於テ胸部筋膜ニ分岐附着セル2箇ノ腱ヲ有ス。

經過 兩側共ニ側方ヨリ正中線ニ向ヒ上斜走セルモ、右側ハ左側ニ比シ經過垂直ニ近シ、筋腹ハ左側最大2.3糎、右側0.7糎ナリ。

第10例 屍體番號、1356、32歳、男性、石川縣人、右胸骨筋(第7圖參照)。

起始 右第6肋軟骨上縁。

停止 胸骨角左側縁ニ於ケル胸部筋膜ニシテ、筋纖維ハ甚ダ夥ク頗ル長キ停止腱ヲ有シ、腱長約5.5糎ナリ。

經過 正中線ニ向ヒ凹曲セル弓形ヲ呈ス、筋腹最大0.5糎ナリ。

第11例 屍體番號、1409、55歳、男性、石川縣人、右胸骨筋(第8圖參照)。

起始 右第6肋軟骨ニ相當セル直腹筋鞘ヨリ起ル。

停止 左胸鎖乳頭筋ニ移行ス。

經過 右側下方ヨリ上内方ニ斜走シ、停止腱ハ途ニ正中線ヲ横切リテ左胸鎖乳頭筋ニ移行ス。筋腹ハ最大3糎ナリ。

第12例 屍體番號、1417、56歳、男性、福井縣人、右胸骨筋(第9圖參照)。

起始 右第6、第7、第8肋軟骨ニ於ケル直腹筋鞘ヨリ起ル。

停止 右胸鎖乳頭筋ニ移行スルモノ、胸骨把柄ヲ約水平ニ左方ニ横走シ胸骨把柄ニ終レルモノ、及ビ右大胸筋ニ移行スルモノ、3箇ヲ區別ス。

經過 右側下方ヨリ上内方ニ斜走ス。筋腹最大1.7糎ナリ。

以上ヲ見ルニ胸骨筋ノ起始、停止、經過、周圍筋ニ對スル關係及ビ大小ハ頗ル多様ニシテ、他ノ身體筋ニ於ケルガ如ク一定セル起始、停止、經過ヲ有セザルモノナリ。筋腹ノ大サニ就キ見ルモ、最大3.7糎、最小0.5糎ニシテ頗ル異同ナルヲ思ハシム。然レドモ一般原則トシテ、Yapノ言ヘルガ如ク、予ノ場合ニアリテモ胸骨筋ハ大胸筋ノ上ニ必ず存在セリ。

Windleハ胸骨筋ハ精神病者ニ頻度多キモノナリト論述シ、又Yapハ先天性無腦兒ニテハ頻度頗ル大ナルモノナリト説ケリ。

予ノ上述セル屍體12例ノ死因ニ就キ見ルニ、老衰4名、肺結核2名、其他動脈硬化症、心筋炎、食道癌、肋膜炎、肺炎、癩瘰癧斯及ビ痔疾等各々1名宛テニシテ、精神病ノ直接死因トナレルモノ1例モ存セザリキ。而シテ其ノ詳細ハ知り難キモ、胸骨筋保持者12體中當市小野慈善院ニ保護ヲ受ケタルモノ6例即チ半数存在セリ。

既ニ「生體ニ於ケル胸骨筋ニ就キテ」ニ於テ述ベタル如ク、Albinusハ胸骨筋ハ直腹筋ノ上方伸展物ナリトシ、Bourienne, Henle, Marjolin, Gegenbaur, 及ビTheile等ハ胸鎖乳頭筋ノ下方伸展物ナリトシ、又Bardeleben, Cunningham, Ruge 及ビYap等ハ胸骨筋ハ大胸筋ノ一異常例ナリト説述セリ。

由テ予モ亦胸骨筋16例(片側胸骨筋8例、兩側胸骨筋4例合計16例)ノ起始及ビ停止ニ就キ、Albinus, Bourienne 及ビBardeleben等ノ言ヘル胸骨筋ノ大胸筋、胸鎖乳頭筋及ビ直腹筋等ニ對スル關係ヲ調査セルニ次ノ如シ。

胸骨筋起始ハ(筋ハ1例ナルモ起始ノ1箇以上ヨリナル時ハ別々ニ之ヲ計算セリ)直腹筋鞘ヨリ起レルモノ10例、第五肋軟骨及ビ第六肋軟骨ヨリ起レルモノ各々4例、第四肋軟骨ヨリ起レルモノ1例ニシテ直腹筋鞘ヨリ起レルモノ最モ多シ。筋停止ニ就キ見ルニ(起始ノ場合ト同ジク、筋ハ1例ナルモ停止ノ1箇以上ヨリナル時ハ別々ニ之ヲ計算セリ)、大胸筋ニ移行セルモノ12例、胸鎖乳頭筋ニ移行セルモノ9例、胸部筋膜ニ終レルモノ8例ニシテ大胸筋ニ終レルモノ最モ多キヲ見タリ。

三. 總 括

以上予ガ昭和2年ヨリ昭和5年ニ至ル當金澤醫科大學學生解剖實習ニ使用セル屍體117體(男性68體、女性49體)ノ胸骨筋ニ就キ調査觀察セル結果ヲ、總括約言スルニ次ノ如シ。

1. 予ハ胸骨筋ヲ117體中12例(左右側別ニ見ル時ハ片側胸骨筋8例、兩側胸骨筋4例合計16例)、即チ10.26%ニ於テ認メタリ。之ヲ諸人種胸骨筋頻度及ビ足立博士調査ニヨル日本人成績ト比較スルニ、中野氏ニヨル支那人ノ21.9%及ビ足立博士ニヨル日本人ノ13.2%及ビ15.0%ヨリ頻度幾分小ナルモ、其ノ他ノ何レノ人種(黑人、愛蘭人、露西亞人、佛蘭西人、英國人及ビ「フィリッピン」人等)ヨリモ頻度頗ル大ナリ。

2. 胸骨筋ノ男女性的差異ヲ見ルニ、男性68例中6例即チ8.82%、女性49例中6例即チ12.24

%ニシテ、男性頻度ハ女性頻度ヨリ幾分小サク、Turnerノ成績ト一致セリ。Shepherdハ男性ハ女性ヨリ頻度大ナリト言ヒ、又 Bardeleben, Cunninghamハ、兩性頻度ニ大小差異ナキモノナリト論述セリ。

3. Windleハ胸骨筋ハ精神病者ニ於テ頻度多キモノナリト論述シ、又 Yapハ先天性無腦兒ニ於テハ頻度頗ル大ナルモノナリト説ケリ。予ノ示セル一二屍體ノ死因ニ就キ見ルニ、老衰4名、肺結核2名、其他動脈硬化症、心筋炎、食道癌、肋膜炎、肺炎、癱瘓質斯及ビ痔疾等各々1名宛テニシテ、精神病ノ直接死因トナレルモノ1例モ存セザリキ。

4. 胸骨筋16例(片側胸骨筋8例、兩側胸骨筋4例合計16例)ノ起始及ビ停止ニ就キ、Albinus, Bourienne及ビ Bardeleben等ノ言ヘル胸骨筋ノ大胸筋、胸鎖乳頭筋及ビ直腹筋等ニ對スル關係ヲ見ルニ、筋起始ハ(筋ハ1例ナルモ起始ノ1箇以上ヨリナル時ハ別々ニ之ヲ計算セリ)直腹筋鞘ヨリ起レルモノ10例、第五及ビ第六肋軟骨ヨリ起レルモノ各々4例、第四肋軟骨ヨリ起レルモノ1例ニシテ、直腹筋鞘ヨリ起レルモノ最モ多ク、筋停止ハ(起始ノ場合ト同ジク、筋ハ1例ナルモ停止ノ1箇以上ヨリナル時ハ別々ニ之ヲ計算セリ)大胸筋ニ移行セルモノ12例、胸鎖乳頭筋ニ移行セルモノ9例、胸部筋膜ニ終レルモノ8例ニシテ、大胸筋ニ移行セルモノ最モ多キヲ見タリ。

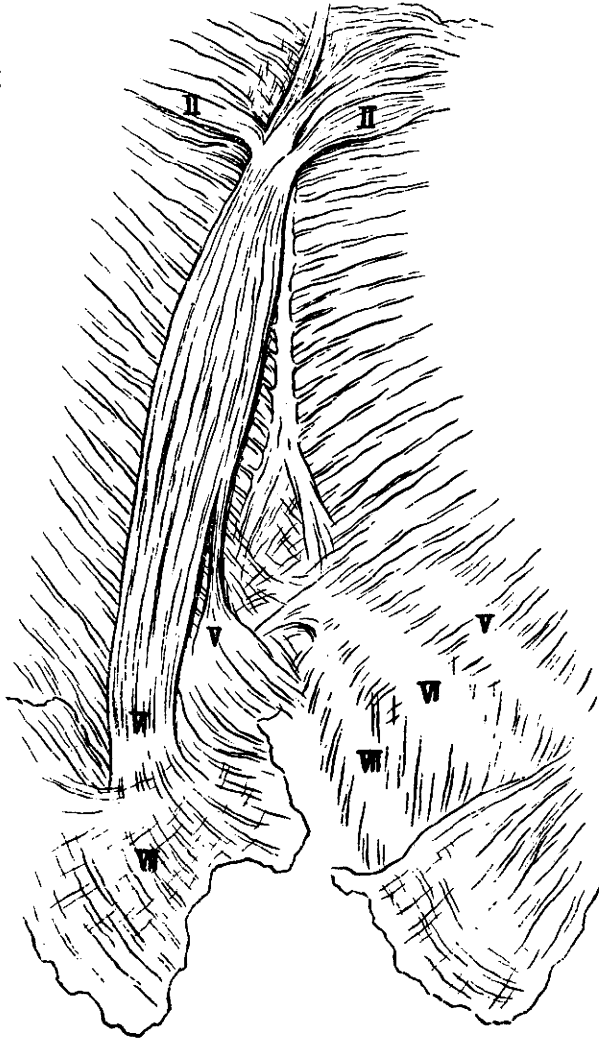
終リニ臨ミ、終始御懇篤ナル御指導ト御校閲ノ勞ヲ賜ハリシ岡本教授ニ對シ深基ナル感謝ノ意ヲ表ス。

文 獻

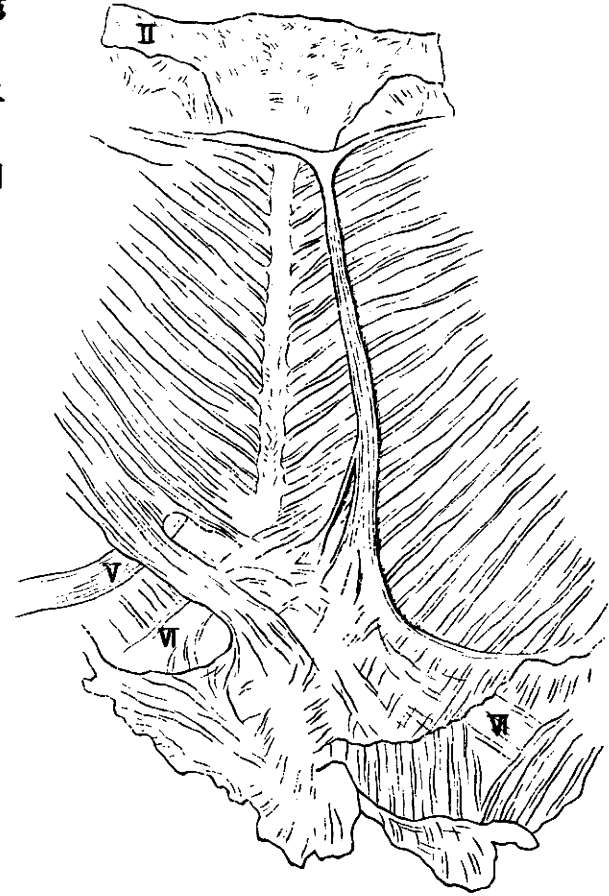
- 1) Adachi, B., Häufigeres Vorkommen des Musculus sternalis bei Japanern. Zeitschrift für Morphologie und Anthropologie. Bd. 7.
- 2) Bardeleben, K., Der Musculus sternalis. Zeitschrift für Anatomie und Entwicklungsgeschichte, Bd. 1.
- 3) Eisler, P., Der Musculus sternalis. Zeitschrift für Morphologie und Anthropologie. Bd. 3. II. 1.
- 4) Frank, Jos., Ueber einen im Leben beobachteten Musculus sternalis. Anatomischer Anzeiger, Bd. 46.
- 5) Fick, R., Zur Frage der Nervenversorgung des Musculus sternalis. Anatomischer Anzeiger, Bd. 50.
- 6) 小金井, 荒井, 波敷: 筋破格統計, 東京醫學會雜誌, 第17卷.
- 7) Malbranc, M., In Sachen des Sternalmuskels. Zeitschrift für Anatomie und Entwicklungsgeschichte. Bd. 2.
- 8) Nakano, T., Beiträge zur Anatomie der Chinesen. Die Statistik der Muskelvarietäten. Folia Anatomica Japonica. Bd. 1 II. 5.
- 9) 二井一馬: 生體ニ於ケル胸骨筋ニ就キテ. 十全會雜誌, 第36卷, 第2號.
- 10) 岡島敬治: 鈴木文太郎纂著人體系統解剖學, 卷ノ2, 大正7年, 東京.
- 11) Pichler, K., Ueber das Vorkommen des Musculus sternalis. Nach Untersuchungen am Lebenden. Anatomischer Anzeiger. Bd. 39.
- 12) Derselbe, 500 Fälle vom Sternalmuskel. Beobachtungen am Lebenden. Zweite Mitteilung. Anatomischer Anzeiger. Bd. 50.
- 13) Rauber-Kopsch, Lehrbuch und Atlas der Anatomie des Menschen. XII. Auflage. Bd. III. Leipzig.
- 14) Ruge, G., Zur Frage der Nervenversorgung des Musculus sternalis. Morphologisches Jahrbuch. Bd. 50. 1917.
- 15) Schwalbe, G. u. Pfitzner, W., Varietäten-Statistik und Anthropologie.

二井論文附圖

第一圖

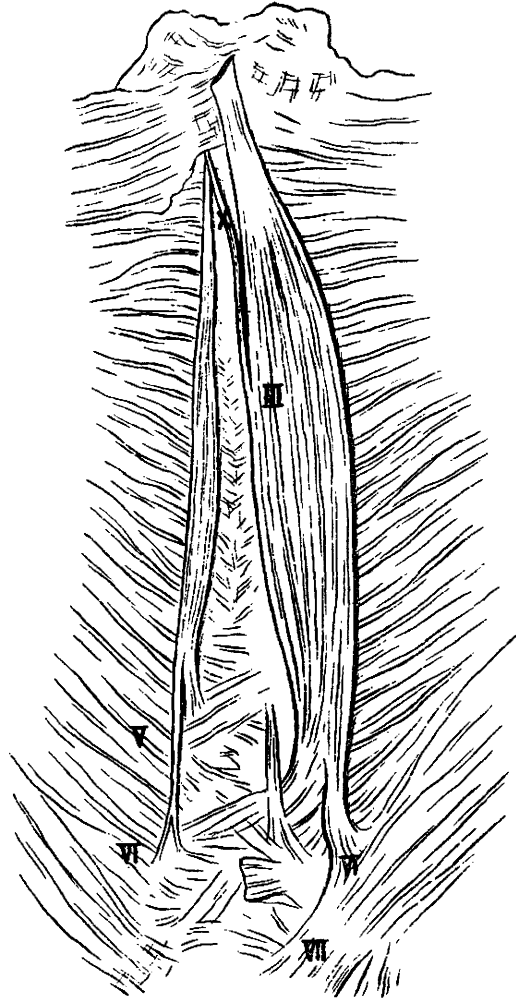


第二圖



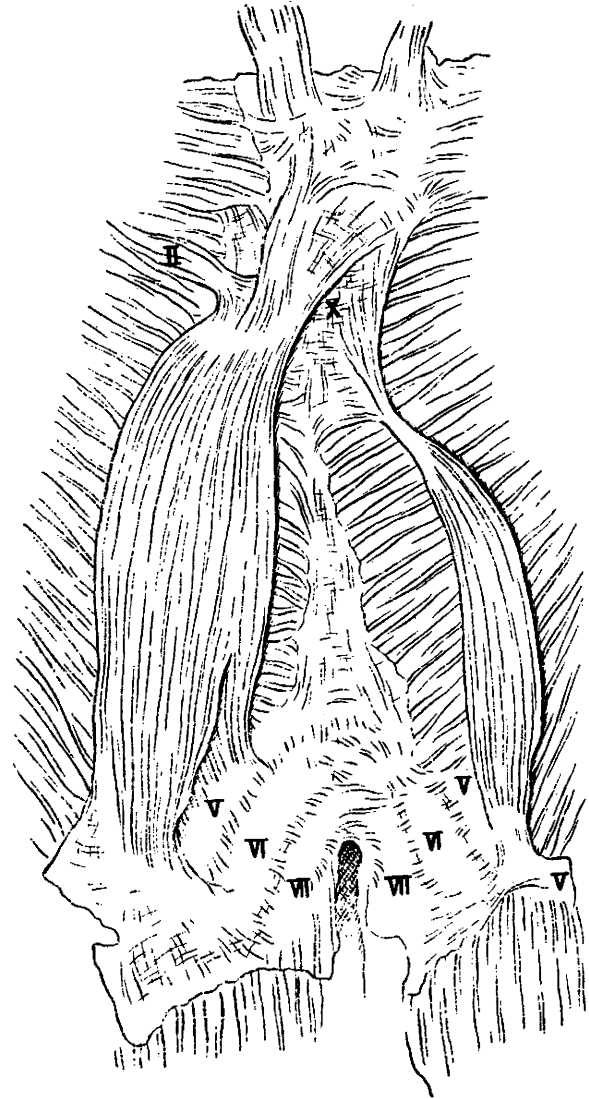
二井論文附圖

第三圖



× Angulus sterni

第四圖



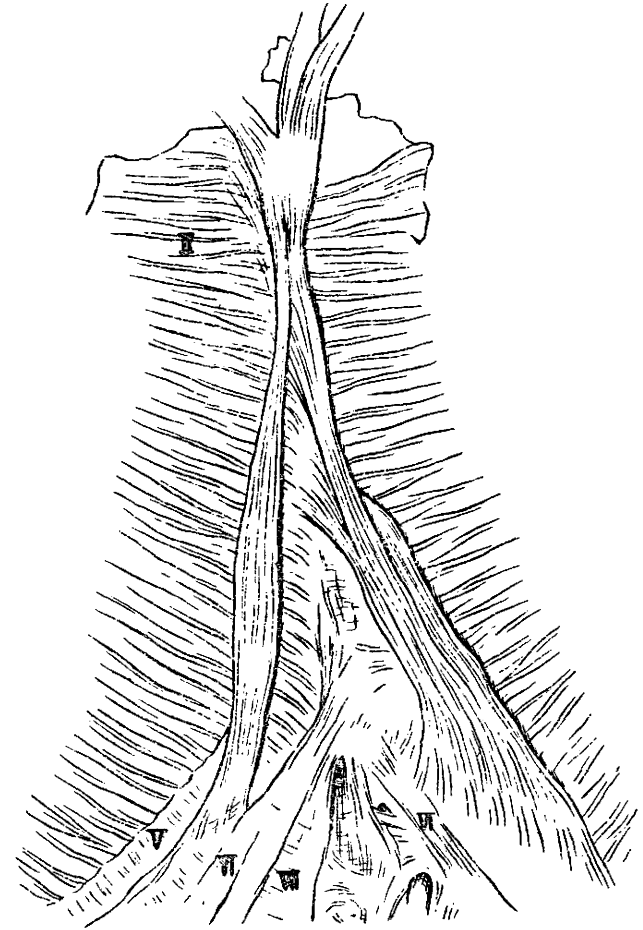
× Angulus sterni

二井論文附圖

第五圖



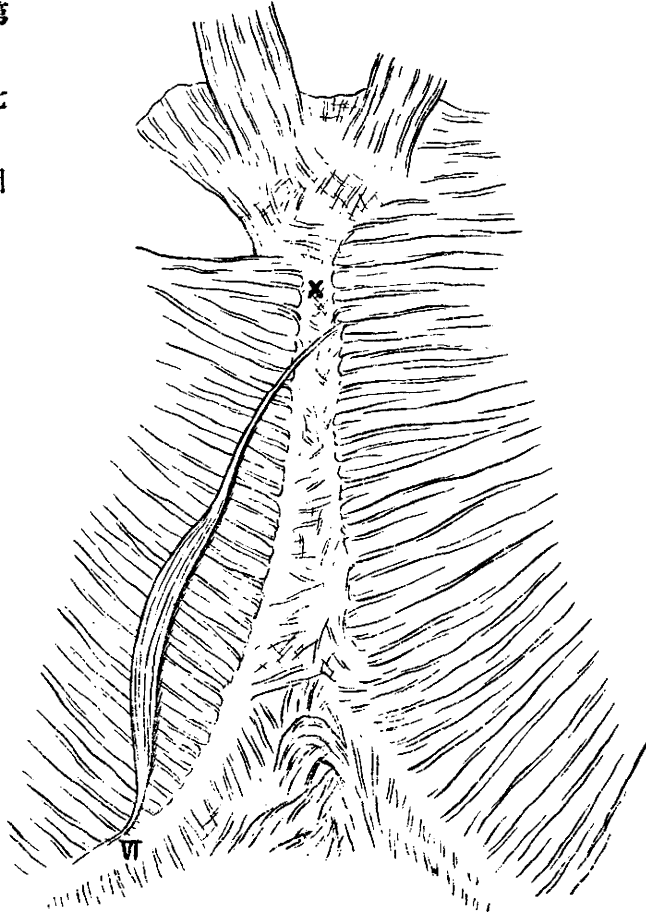
第六圖



⊗ Angulus sterni ⊠ IV. Intercostalraum

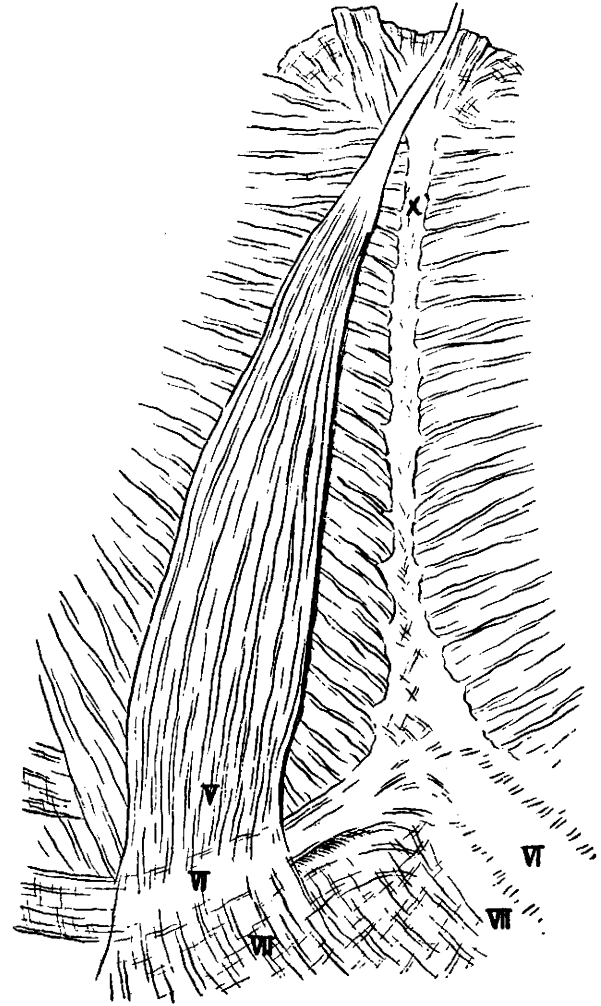
二井論文附圖

第七圖



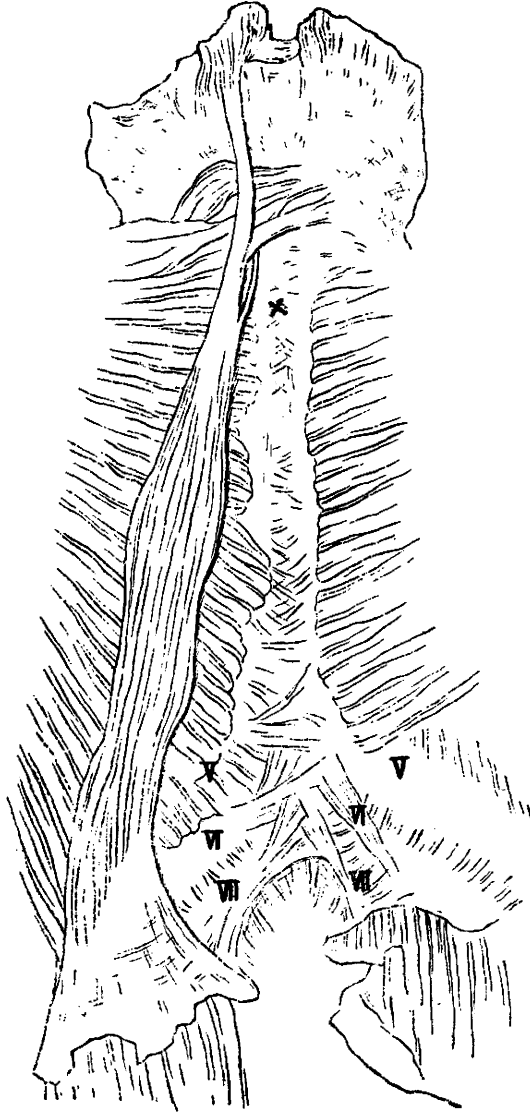
× Angulus sterni

第八圖



× Anguius sterni

第九圖



x Angulus sterni

Dritte Mitteilung. Morphologische Arbeiten. Bd. 3. 16) Yap, S. E., Musculus sternalis
in Filipinos. Anatomical Record. Vol. 21.

附 圖 說 明

附圖ハ總テ實物二分ノ一ニシテ胸骨筋ヲ示シ、圖中數字ハ肋骨順位ヲ表ハス。

- 第1圖 屍體番號, 1200, 60歳, 女性, 右胸骨筋.
- 第2圖 屍體番號, 1219, 76歳, 女性, 左胸骨筋.
- 第3圖 屍體番號, 1288, 55歳, 男性, 兩側胸骨筋.
- 第4圖 屍體番號, 1304, 18歳, 女性, 兩側胸骨筋.
- 第5圖 屍體番號, 1321, 63歳, 男性, 右胸骨筋.
- 第6圖 屍體番號, 1350, 75歳, 女性, 兩側胸骨筋.
- 第7圖 屍體番號, 1356, 32歳, 男性, 右胸骨筋.
- 第8圖 屍體番號, 1409, 55歳, 男性, 右胸骨筋.
- 第9圖 屍體番號, 1417, 56歳, 男性, 右胸骨筋.